

2010 年度 第 1 期  
第 7 回 これからの子宮がん対策

子宮頸がん

産婦人科 三澤 俊哉

2011 年 3 月 18 日発行

1. 子宮頸がん検診

今回のシリーズですでに説明しましたが、子宮頸がんはハイリスク型 HPV(ヒトパピローマウイルス)の持続感染を経て発症することが解明されています。(図 1)この発見をした Zur Hausen 博士は 2008 年にノーベル生理学医学賞を受賞しました。(図 2)現在は HPV ワクチンが開発されていますが、やはり子宮頸がんの検診(細胞診)を受けることが重要です。現行の HPV ワクチンを接種しても、子宮頸がんのすべてが予防できるわけではないからです。子宮頸がん検診は、20 歳以後もしくは初交後 3 年から開始し、2 年の間隔で施行することが推奨されています。

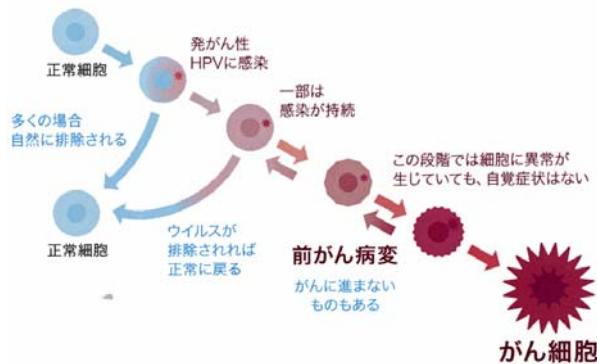


図1 高リスクHPV感染と子宮頸がん細胞への変化



図2 子宮頸がんの原因を解明したZur Hausen博士

2. ハイリスク型 HPV 検査

現在は、子宮頸がんの原因となるハイリスク型 HPV 感染の有無を検査することができます。対象となるのは、子宮頸がん検診で ASC-US というもっとも軽い異常を指摘された婦人です。(図 3)HPV 検査が陰性なら、子宮頸がんの前がん病変である子宮頸部異形成が存在する可能性は低いと判断できます。反対に陽性であれば、精密検査が必要です。この検査は、病院もしくは自宅(自己採取キット)で行えます。今後のプランとして、子宮頸がん検診の一次検査として行い、陽性者のみに細胞診を行う方法も考えられています。(図 4)自分で子宮頸がんの検診を行いたい方には、HPV 検査自己採取キットがおすすめです。

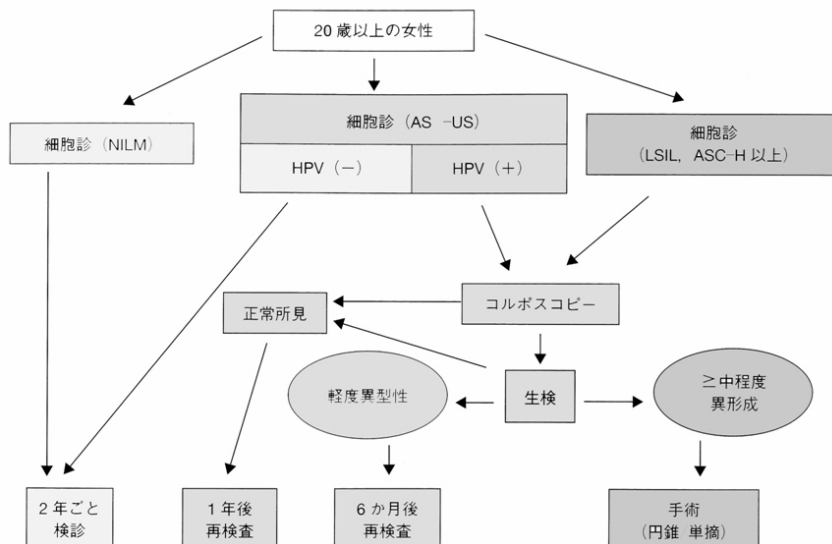


図3 HPV検査を併用する現在の子宮頸がん検診

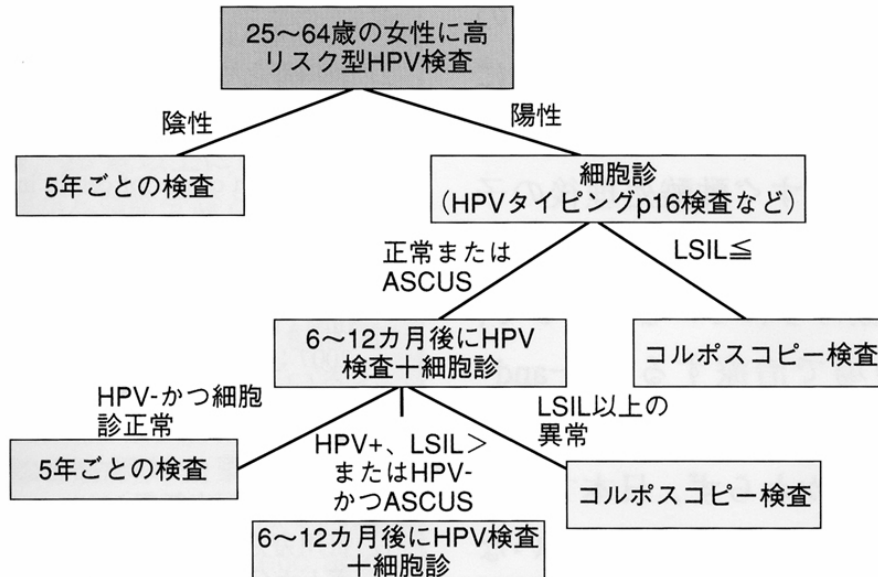


図4 HPV検査で一次検査を行う今後の子宮頸がん検診プラン

### 3. HPV ワクチン

ハイリスク型 HPV の中で 16・18 型に対するワクチンが開発され、60 - 70%の子宮頸がんが予防できることが期待されています。欧米などでは、若い世代へ接種がすでにされています。日本でも、2010年から希望者に対する自費接種が始まっています。幸い、名古屋市は他の政令都市に先駆けて中学1・2年生に対する公費による接種を開始しました。とくに若い婦人は HPV ワクチンを接種する事をお勧めします。(図5)

- 発がん性HPVは感染してもほとんどは自然に排除されますが、何度でも感染します。
- 成人女性でも、ワクチンを接種することで、再感染を防ぐことができます。



図5 HPVワクチンを接種しましょう

### 4. 全タイプ型の HPV ワクチン

すべてのハイリスク型 HPV を予防できるワクチンの開発が、日本を含めた全世界で進んでいます。この次世代ワクチンが完成すれば、すべての子宮頸がんを予防できる可能性があります。

### 5. HPV 感染に対する治療ワクチン

前がん病変である子宮頸部異形成は、HPV が感染した状態と考えられます。HPV 感染を治療できるワクチンの開発が試みられています。この HPV 治療ワクチンにより、子宮頸がんを前がん病変の状態の治療できる可能性があります。

全タイプ型の HPV ワクチンや HPV 治療ワクチンの開発を待ちつつ、現在ある HPV ワクチンの接種や HPV 検査を含めた子宮頸がん検診を行って、子宮頸がんの予防に努めましょう。

発行が遅れたことをお詫び申し上げます。

<p>次回シリーズ 乳がん</p> <p>この内容は、名古屋掖済会病院ホームページでもご覧頂けます。</p>	<p>2011年5月開始予定</p> <p>えきさいかい </p>
--	-----------------------------------

名古屋掖済会病院は、愛知県「がん診療拠点病院」の指定を受けました。